

TAX&LAW

「キャッシュ・フロー計算書」の見方と判断のポイント

(1) 「営業キャッシュ・フロー」のポイント

「営業キャッシュ・フロー」を判断するポイントは次の2つです。

- ・利益が資金として残っているか
- ・残っていないとすれば、原因は何か

もしも取引がすべて現金でその場で決済されていたなら、利益の分だけ資金（現金や預金）が増加することになります。赤字になればその分だけ資金が減少することになります。しかし実際にはその通りにはなりません。それは多くが信用取引で動いており物の動きと資金の動きが異なるからです。それを営業循環の中で表現したものが「営業キャッシュ・フロー」となります。

例) 当期税引前利益：12,385

減価償却費等非資金項目：+16,960（減価償却費は資金の流出ではない）

損益項目の調整：-3677（固定資産売却損益などは投資キャッシュ・フローで表現する）

売上債権の増減額：-511（売上高に比べ 511 の売掛金があり、その分入ってこない）

棚卸資産の増減額：-50（売上原価に比べ 50 の在庫があり、その分入ってこない）

仕入債務の増減額：+2,135（仕入高に比べ 2,135 の買掛金があり、その分資金の流出ではない）

その他資産負債の増減額：-296

法人税等の支払額：-7,217

営業活動によるキャッシュ・フロー：19,729

当期税引前利益 12,385 に足したり引いたりすると営業活動によるキャッシュ・フローの 19,729 になります。

例えば、売掛金増加は資金が入ってこないことを表現し、売掛金の減少は資金が出ていくことを表現しています。

もしも現金決済で行われていたらこの会社の税引前利益は 19,729 であったことを示しており、実際の 12,385 と 19,729 との差の原因をここで表現しています。

(2) 「投資キャッシュ・フロー」「財務キャッシュ・フロー」のポイント

ここで「投資」とは有価証券や固定資産の売買活動、「財務」とは借入金の新規や返済活動を表現しています。

例) 営業活動によるキャッシュ・フロー：19,729

有形固定資産の取得：-16,312

投資活動によるキャッシュ・フロー：-16,312

長期借入金の返済：-4,265

長期借入金による収入：4,235
財務活動によるキャッシュ・フロー：-30
現金等の増減額：3,387
現金等の期首残高：51,437
現金等の期末残高：54,824

(3) キャッシュ・フロー計算書から読み取れたこと

営業循環での現金獲得は 19,729 あったものの設備投資や返済などがあり結果として1年間での現金等の獲得は 3,387 であったこととなります。今期は大きな設備投資を行ったことが読み取れます。設備投資は損益計算書では減価償却費として表現されますが、会計上の要請から購入額を使用期間（例えば 10 年など）に配分して表現しますので、損益計算書では資金流出の原因を表現することができません。

損益計算書は企業の活動報告書、貸借対照表は企業の財産負債報告書であり、キャッシュ・フロー計算書は企業の資金報告書といえます。これら 3 つの報告書は相互に関連しており、特にどれだけ企業が自由に使えるお金があるのかなど今後ますますキャッシュ・フロー計算書は重要視されていくことでしょう。

今回は「部門別業績管理」について解説していきます。

参照：『実践！経営助言』TKC 出版

執筆者 TKC 近畿兵庫会 阪神支部 税理士 吉本 篤子